

■原著論文

日本の大学での森田療法の教育についての一考察

— ウォッシュバーン大学と岩手大学での教育を比較して —

我妻 則明¹⁾, Brian K. Ogawa²⁾

抄録：医療以外の相談業務にあたる専門職を養成する大学で、森田療法をどのように教育していくのかという参考にするために、心理と福祉領域の専門職を養成しているアメリカ合衆国のウォッシュバーン大学 (Washburn University) での森田療法プログラムと教員を養成している岩手大学教育学部での教育を比較して考察した。このウォッシュバーン大学での森田療法プログラムは、ウォッシュバーン大学が認定したプログラムである。その結果、次の3点が日本の大学で森田療法の教育を実施する課題として挙げられた。

- 1) 法令による規制：日本の場合、法令により、授業の内容までが厳しく規制されている。そのため、ウォッシュバーン大学のように大学独自の森田療法認定プログラムを設けるのが困難である。現実的には、規制されたカリキュラムの中で、いかに森田療法を授業の内容として取り上げられるかということが課題となろう。
 - 2) 授業の形態：合宿形式の授業、海外で森田療法を学ぶ授業、インターンシップという実習に相当する授業は、体験的に森田療法を学ぶという点では優れた授業の形態ではあるが、日本ではいろいろな理由で実施困難である。日本では、講義と演習という座学が中心の授業形態とならざるをえない。そのため、その講義や演習で使用する教材が、どれほど体験的な学習を可能にさせることができるのかが重要な教育上の要因となる。
 - 3) 教材：実際の面接場面を学習するための逐語録やDVDなどの教材を作成する段階に来ている。これらの逐語録やDVDは、外来森田療法のガイドラインに示されている項目ごとに整理されて作成されるとさらに一層効果が増すものと考えられる。また、ワークブックと言われる自学自習用の本があると教育効果が上がると思われる。
- 結論として、日本の大学での森田療法の教育については、我々森田療法家としてやらなければならないことが数多くあると考えられる。

日本森田療法学会雑誌 25 ; 123-132, 2014

Key Words : *education, training, university, teaching material*

I. はじめに

2013年10月7日受理

*A Study of Education of Morita Therapy at Japanese Universities—Comparison between the Training at Washburn University (USA) and Iwate University (Japan)

- 1) 岩手大学教育学部特別支援教育科
(〒020-8550 岩手県盛岡市上田三丁目16番33号)
Noriaki Azuma : Department of Special Needs Education, Faculty of Education, Iwate University
- 2) Department of Human Services, School of Applied Studies, Washburn University
(1700 SW College Ave., Topeka, Kansas 66621, U. S. A.)

日本森田療法学会の研修委員長を務める立松⁶⁾は、日本での今までの森田療法家の養成に関して「一番問題なのが、長い間ほとんど専門家を育てようとしてこなかったこと」、「森田療法は専門家の訓練という点で重大な欠陥をもっていたといえる」と述べて、従来、森田療法では、森田療法家の養成がなごりにされていたことを強調している。一方で、「外来治療の訓練の場と方法論は、

まったく新しく組織されることとなった」と述べて、「専門家の訓練の面で大きな転機となったのが、1998年の東京森田療法セミナーの開講である」として、訓練の場としてのセミナーについて記述がなされている。

ただ、このセミナーは、医師、心理士、看護師等現職者を対象としている訓練の場であり、大学における森田療法家の養成については、立松⁹⁾は言及していない。大学での森田療法家の養成については、立松⁹⁾が述べているように、「長い間ほとんど専門家を育てようとしてこなかった」のであり、「森田療法は専門家の訓練という点で重大な欠陥をもっていたといえる」のかもしれない。

一方で、立松⁹⁾は、「精神医療に限定されがちであった適用領域が身体各科や歯科の臨床、緩和医療、医療・教育・産業などでの心理相談、教育、福祉などの領域へと広がり」と述べて、森田療法が適用範囲を広げていることを述べている。さらに、外来森田療法のガイドライン²⁾では、「ここで外来という名称を用いるのは入院森田療法と区別するためであり、必ずしも医療場面に限定するわけではなく、職場や学校での相談業務などもこれに含まれる。」と述べ、医療以外の相談業務に、このガイドラインが適用されることを示している。しかし、医療以外の相談業務にあたる心理士、教師等を養成する大学教育の中で、どのように森田療法を教育していくかの議論は、従来、なされてこなかったのではないと思われる。

一方で、森田療法を学生へ教えるという教育を考察することは、何をどう教えるか、つまり、教育の内容と方法を考察することである。このうち、教育の内容とは、森田療法の何を教えるかということであり、そのことは、立松⁹⁾も述べているように森田療法の本質は何かを教えることになる。現実には、中村他¹⁰⁾は、外来森田療法のガイドライン作成にあたって、次のように述べている。

「特に森田療法を新たに学ぼうとする人々にとって、治療者の数だけ異なる外来療法がある、といった印象を与えてきた点は否めない。実際、森田療法を志す人々のために、『森田療法セミナー』が東京、札幌、盛岡、大阪、福岡と全国各地に拡大されるにつれ、セミナーに参加した初学

者からは『標準的な外来療法』を提示してほしいといった要望が高まってきたのである。」

つまり、学習する者から見れば、森田療法の本質が包含されている標準的な外来療法であって、それを学習すれば、森田療法の本質が理解できて森田療法が実施できる教材を提示して欲しいということである。このように森田療法の教育を考察することは、すなわち、単に森田療法家の養成にとどまらず、森田療法の本質を考察することになるのである。

本論文では、日本の大学での森田療法の教育、特に、医療以外の相談業務にあたる専門職を養成する大学で、森田療法をどのように教育していくのかという参考にするために、心理と福祉領域の専門職を養成しているアメリカ合衆国のウォッシュバーン大学(Washburn University)での森田療法プログラムを中心に紹介したい。なぜならば、ウォッシュバーン大学での森田療法プログラムは、世界で初めてと思われる学部レベルの体系だった森田療法家養成プログラムであり、ウォッシュバーン大学が正式に教育プログラムとして認定しているからである。それと併せて、第一著者が勤務する教員を養成している岩手大学教育学部と大学院教育学研究科での森田療法の教育と比較し、日本での特に医療以外の相談業務にあたる専門職を養成する中での森田療法の教育をどのように実施していったらよいかの考察を行うことを本論文の目的とする。

セミナーという形での現職教育も重要であるのは当然のことであるが、森田療法の普及と対象の拡大という観点からは、医療職も含めた専門職を養成している大学教育の中で、いかに森田療法の教育をしていくのかという観点も同様に重要であると考えられるからである。

Ⅱ. データ収集

ウォッシュバーン大学の大学認定森田療法プログラムの概要等については、ウォッシュバーン大学のホームページより情報を得た。その授業の内容等については、プログラム実施の中心となっている第二著者からシラバス等の関連資料を送付し

てもらった。また、2011年11月14日から同年同月18日まで、第一著者がウォッシュバーン大学を訪問して、第二著者と学生から関連資料と情報を得た。

岩手大学での森田療法の教育については、第一著者が実施しているので、その教育経験を基として記述した。そして、ウォッシュバーン大学と岩手大学での森田療法の教育を、指導形態、指導内容・教材、実践指導、受講生の所属の項目で比較して、日本の大学で森田療法の教育をどのように実施していったらよいのかの考察を行った。

Ⅲ. 米国ウォッシュバーン大学と 岩手大学における森田療法教育の 比較と検討

1) ウォッシュバーン大学での教育

(1) ウォッシュバーン大学の概要

アメリカ合衆国カンザス州の州都であるトピカにある私立大学である。学生数は約7,300人、教職員数は約1,000人である。芸術科学学部 (College of Arts and Sciences), 応用研究学部 (School of Applied Studies), 商学部 (School of Business), 法学部 (School of Law), 看護学部 (School of Nursing) の5学部からなる。応用研究学部は、福祉 (Human Services), 社会福祉 (Social Work), 関連医療 (Allied Health), 刑事裁判と法学 (Criminal Justice & Legal Studies) の4つの学科からなる。福祉学科は、大学認定の4つのプログラムを提供しており、その一つが森田療法 (Morita Therapy) と呼ばれるプログラムである。他の3つのプログラムは、依存症カウンセリング (Addiction Counseling), 非営利的管理 (Non-Profit Management), 被害者・生存者福祉 (Victim/Survivor Services) である。

なお、2003年にテキサス州ヒューストンへ移転したメニンガークリニックとウォッシュバーン大学は提携関係にあり、メニンガークリニックへ卒業生を職員として供給し、また、メニンガークリニックの職員がウォッシュバーン大学の教員となったりした。移転したメニンガークリニックの教育部門は、ベイラー医科大学メニンガー精神

医学・行動科学学科 (Menninger Department of Psychiatry & Behavioral Sciences at Baylor College of Medicine) となって活動している。

ウォッシュバーン大学の認定による森田療法プログラムの設立経緯については、以下の通りである。

2004年5月に、第一著者がウォッシュバーン大学を訪問して、第二著者及び同僚の教員と森田療法に関して意見交換を行った。また、教員と学生を対象として講演を行った。さらに、副学長の Dr. Ron Wasserstein と学部長の Dr. William S. Dunlap とにも第一著者が面会し、森田療法研究所の設立可能性について意見交換を行った。なお、これらの意見交換を行った場所は、カール・メニンガー博士研究室 (Dr. Karl Menninger Room) という部屋で、当時は会議室として使われていた。

その後、ウォッシュバーン大学内部での検討の後、2006年からウォッシュバーン大学が認定した森田療法プログラムとして学生への教育が開始された。

(2) 森田療法プログラムの概要

このプログラムの特徴は、次の4点であると考えられる。

- ① 森田療法を“life way”すなわち、森田療法的生活方法として捉えて教育している。
- ② 不安障害ばかりでなく、精神保健、アルコールと薬物依存、PTSD、犯罪被害など、また年齢も若者から老人までを含めた幅広い支援の対象者を想定した森田療法を教育している。
- ③ 森田療法の体験的理解を重視して、通常の座学による授業でも体験的理解ができるように工夫しているばかりでなく、合宿形式の集中授業を実施している。
- ④ 海外で森田療法を学ぶ機会を授業として設け、幅広い視野を持てるように教育している。

このプログラムは、以下の5つの授業から構成されている。

東洋の治療法・介入と治療

(Eastern Therapy Intervention and Treatment)

合宿森田療法 (Morita Therapy Intensive)

カウンセリングでの森田技法

(Morita Methods in Counseling)

森田療法調査演習

(Morita Therapy Research Seminar)

インターン実習あるいは卒業研究

(Internship or Directed Study)

次にそれぞれの授業の概要を記載していく。

○東洋の治療法・介入と治療

(Eastern Therapy Intervention and Treatment)

この授業は、6日間で1回4時間の授業を10回計40時間集中講義形式で行う授業である。内容は、森田療法と内観療法の概説で、特に森田療法に時間が割かれている。各回の授業内容は、次の通りである。

1回：はじめに。人生、苦悩、癒しについての東洋の考え方

(Introduction, Eastern Paradigms of Life, Suffering, and Healing)

2回：森田療法の歴史と哲学

(Morita Therapy, History and Philosophy)

3回：森田療法の歴史と哲学(続)

(Morita Therapy, History and Philosophy (cont.))

4回：森田療法の原理

(Morita Therapy, Major Principles)

5回：森田療法の原理(続)

(Morita Therapy, Major Principles (cont.))

6回：森田療法の治療設定と応用

(Morita Therapy, Therapeutic Settings and Applications)

7回：内観療法(Naikan Therapy)

8回：内観療法(続)

(Naikan Therapy (cont.))

9回：文化に共通のモデル

(Transcultural Model)

10回：おわりに。最終試験

(Closing Comments, Final Examination)

○合宿森田療法(Morita Therapy Intensive)

この授業は、5日間の合宿形式の授業である。

この体験学習を通じて、森田療法の考えが生活の中で実際にどのように実践されているかを学ぶ。具体的には、観察、作業(食事の準備、後片付け、庭の手入れ、農作業等)、日記指導、無言の時間(半日硬貨を口に入れて過ごす)、体験したことを相互に教えあう学習などを実施する。これらの活動に専念することにより、より健康的で生産的なプロフェッショナルとなることを学ぶ。参加者は10~15名である。

○カウンセリングでの森田技法

(Morita Methods in Counseling)

この授業は、6日間で1回4時間の授業を10回計40時間集中講義形式で行う授業である。第二著者の森田療法に関する著書⁵⁾に沿って授業を実施している。各回の授業内容は、次の通りである。

1回：はじめに、授業の概観、森田療法の歴史的発展

(Introduction and Course Overview, Historical Development of Morita Therapy)

2回：西洋の療法との比較

(Comparison with Western Modalities)

3回：不安障害の評価

(Valuation of Anxiety Disorder)

4回：主要な治療目標

(Major Therapeutic Goals)

5回：鍵となる方法と技法

(Key Methods and Techniques)

6回：古典的森田療法

(Classic Morita Therapy)

7回：外来療法(Outpatient Treatment)

8回：集団カウンセリング

(Group Counseling)

9回：結論(Concluding Remarks)

10回：おわりに。最終試験

(Closing Comments, Final Examination)

○森田療法調査演習

(Morita Therapy Research Seminar)

この授業は、米国以外の海外で森田療法の治療実践をしている施設の見学や国際森田療法学会へ

の参加など、世界で行われている多様な森田療法の実践について学習をし、幅広い視野を持つための授業である。今までの渡航先は、以下の通りである。

2006年 東京で慈恵医大等の森田療法施設を参観

2007年 カナダで開催の第6回国際森田療法学会へ参加

2010年 オーストラリアで開催の第7回国際森田療法学会へ参加

2011年 イギリスで実施された研修会「森田療法：トラウマに対する文脈療法」

(Morita Therapy : Contextual Therapy in response to Trauma) への参加と森田療法を取り入れて治療実践をしているマイタイム (My Time clinical practice incorporating Morita Therapy) という施設の実地見学

○インターン実習あるいは卒業研究

(Internship or Directed Study)

学生はインターン実習か卒業研究のいずれかを選択する。このうち、インターン実習は、1学期間に180時間の実地研修を実施する。それには、森田療法認定プログラムを修了した施設職員がいる施設に学生を派遣して、その職員が現地の指導者として付く。卒業研究は、第二著者の指導の下に研究を実施するものである。研究の例としては、中学校の学級経営に森田療法を応用する研究、合宿森田療法の授業の企画・運営に関する研究、入院している児童への森田療法を応用した教育の研究、依存症からの回復のために森田療法を応用する研究などである。

以上の正規の授業以外に、森田学習グループ (Morita Study Group) という学生の自主的な勉強会があり、読書会等活発に活動している。

この森田療法プログラムには、約30名の受講者がいるとのことであるが、そのうち、毎年10名程度がすべての単位を取得して認定プログラムを修了している。学生によると、西洋の心理療法はいわゆる症状に着目して、それを直接取り除くという方法を取るが、森田療法は生活全体を対象として扱い、結果として症状がなくなるという点が西

洋の心理療法と比較して魅力的であるとのことであった。卒業後は、日本で言えば、精神保健福祉士、臨床心理士などの専門家として就職している。数名は、大学院博士課程に進学し、森田療法で博士号を取得し、他大学の教員となる者も出始めている。

2) 岩手大学での教育

(1) 岩手大学の概要

岩手県の県庁所在地の盛岡市にある国立大学法人立の大学である。学生数は約5,900人、教職員数は約800人で、ウォッシュバーン大学と同じ程度の規模の大学である。農学部、工学部、教育学部、人文社会科学部の4学部よりなる。教育学部は学校教員養成課程、生涯教育課程、芸術文化課程よりなり、学校教員養成課程は、学校教育コースと第一著者が所属する特別支援教育コースとからなる。

特別支援教育コースの入学定員は10名であるが、1年次後期に学校教育コースから約5名がサブコースとして編入してくるため、卒業生は約15名となる。就職先は、ほとんどが特別支援学校か小学校あるいは中学校の教員となる。

日本の場合、教員免許に必要な単位を与えるカリキュラムは、教育職員免許法などの法令によって全国一律に規定されている。さらに、教員養成に携わる大学教員の業績調査、シラバス等の書類を文部科学省に提出して、中央教育審議会による課程認定を受けなければ、教員免許に必要な単位を出す授業を設けることができない。特に、特別支援教諭免許は、教育職員免許法が平成19年に大改正され、それに対応して岩手大学では平成19年度に課程認定を受け、平成20年度から現在のカリキュラムで教育を行っている。岩手大学教育学部の特別支援教育コースでは、知的障害者、肢体不自由者、病弱者の領域の特別支援教諭免許の単位を出す授業を実施しているが、それ以外に法令で定められた視覚障害者、聴覚障害者、重複・LD等領域 (言語、重複、情緒・LD・ADHD) の授業を非常勤講師により実施して、特別支援教諭免許に必要な単位を教育実習も含めて26単位を出している。常勤教員は4名おり、第一著者は病弱者

の領域を担当している。

(2) 森田療法の教育の概要

以下に第一著者が森田療法の教育を実施している授業の概要を説明する。以下の授業すべては、日本の他大学と同じように1回90分の授業を15回行う標準的な形態の授業である。

○心の理解

この授業は、昔は一般教養、現在は共通教育と言っている学部1年生を対象とした授業である。受講生は約60名いるが、対象学生はほとんどが農学部動物科学課程と共同獣医学科の学生である。教員免許とは関係のない授業なので、授業内容は自由度が高い。

15回の授業のうち前半の8回は心理科の教員が基礎心理学を講義している。後半の7回が第一著者の担当で、そのうち、3回を森田療法に、2回を統合失調症に、2回をアルコール依存症に充てている。

3回の森田療法の授業は、森田療法ビデオ全集第2巻「常盤台神経科」を上映しながら、その画面に対応して説明している。前提となる知識がない学生なので、専門用語はあまり使わずに分かり易い授業となることを心掛けている。

○病弱者の心理・生理・病理

これは特別支援教諭免許の必修の授業で、受講生は約60名でほとんどが教育学部学校教員養成課程の学生2～4年生である。岩手大学教育学部では、教育学部の学生で希望する者には誰でも特別支援教諭免許を取得できるような完全開放性を取っているため、特別支援教育コースの学生以外にも多数受講している。

森田療法は、15回の授業のうち2回を当てている。森田療法ビデオ全集第1巻「生きる」を上映しながら、不安障害と森田療法の基礎的事項を説明している。

残りの13回は病弱特別支援学校に多い他の精神疾患と身体疾患についての授業をしている。

○病弱者へのカウンセリング

これは選択の授業で、特別支援教育コースの学生2～4年生約10名が受講している。

15回の授業のうち、5回は子どものアセスメントについて授業を行い、残り10回を森田療法の教

育にあてている。10回のうち4回は、森田療法ビデオ全集第2巻「常盤台神経科」を上映しながら、森田療法の原理について詳細な説明を行っている。残り6回を石山・我妻³⁾の本を教科書として森田療法を取り入れたカウンセリングについて説明している。特に、その本の中で、学生自身の体験を基に回答させるといった演習ができる部分があるので、それらの部分を活用して、できるだけ学生参加型の授業を行うようにしている。

○特別支援カウンセリング特論、特別支援カウンセリング特別演習Ⅱ

これは大学院修士課程の授業である。大学院特別支援教育コースの定員は4名である。普通、大学院へは学部の特別支援教育コースの卒業生が入学してくることが想定されるが、そうした学生は毎年1名程度である。それ以外の学生は、普通教諭免許を取得したが特別支援教諭免許状は取得していないために、特別支援教諭免許状に必要な単位を取得することを目的として入学して来る。つまり、大学院入学者といっても、特別支援教育については、ほとんど基礎知識を持っていない学生が入学してくる。こうした学生は、大学院修士課程2年間に、学部の特別支援教諭免許状に必要な単位を取得できる授業を受講し、併せて、大学院の授業も受講するというをしている。また、現職の教員も2年に1名程度入学してくる。こうした現職教員もカウンセリングについては、何も知識がないのが普通である。

このため、大学院の授業も、基礎的な事項から始めて大学院レベルの内容まで持ち上げるという授業をしている。この理由で、特別支援カウンセリング特論と特別支援カウンセリング特別演習Ⅱは、修士1年前期の授業で、週各1回、つまり実質的には週2回の授業、合計30回の授業として実施している。

初めの4回は、森田療法ビデオ全集第1巻「生きる」を上映しながら、不安障害と森田療法の基礎的事項を説明している。次の5回は、森田療法ビデオ全集第2巻「常盤台神経科」を上映しながら、森田療法の原理について詳細な説明を行っている。次の5回は、外来森田療法のガイドライン²⁾についての説明を行っている。次の10回は、

表 1 ウォッシュバーン大学と岩手大学との比較

	指導形態	指導内容・教材	実践指導	受講生の所属
ウォッシュバーン大学	講義	森田療法の概要・講師の著書		福祉系と心理系の学科
	合宿形式の学習	森田療法の体験的学習	体験的な実践指導	
	海外での学習	多様な森田療法の学習		
	インターン実習	現場教員による実践的指導	現場での実践指導	
	卒業・修了研究	大学教員による指導		
岩手大学	講義	森田療法の概要・ビデオ		教員養成学部
	演習	ロールプレイによる模擬演習	模擬的な実践指導	
	卒業・修了研究	大学教員による指導		

石山・我妻³⁾の本を教科書として森田療法を取り入れたカウンセリングについて説明し、演習ができる部分を活用して学生参加型の授業を行っている。残りの6回は、英語の文献も含めて、森田療法に関する論文の購読演習をしている。

以上は第一著者が森田療法の教育を実施している授業の概要である。

ウォッシュバーン大学と岩手大学での森田療法の教育を、指導形態、指導内容・教材、実践指導、受講生の所属の項目で比較したものが表1である。

Ⅳ. 考 察

前節で述べたウォッシュバーン大学と岩手大学での森田療法の教育を比較して、第一著者と第二著者とで意見交換をした。二人とも意見が一致した事項は、日本の法令適用の厳しさである。アメリカでも、教員免許や臨床心理士等の資格については各州の法令が適用されるが、一方で、各大学の裁量も認められている部分があり、大学間の競争により優れた教育がなされるという考えがある。しかし、例えば教員免許に関して日本では文部科学省による課程認定を受けなければならず、この認定を受けるために法令で定められた教育課程を各大学で設けた結果、全国一律の教育課程となるのである。

一方で、森田療法が開発されてから約90年も経つというにもかかわらず、日本では大学で森田療法を教育するための正式な教育課程が定められ

ていないことに、第二著者は驚愕していた。そうした状況下で、よく森田療法の後継者が出現し、森田療法が存続してきたことに驚愕をしていた。

他方、ウォッシュバーン大学でのプログラムの問題点としては、福祉系と心理系の学科の基本的なカリキュラムの上に、この森田療法のプログラムが乗るといふ二階建てとなっているので、学生の負担が過重となっているという意見が出された。そのため、受講者は約30名いるのだから、すべての単位を取得して有資格者となるのは10名程度と脱落率が高いのが短所と言えれば短所と言えるかもしれない。

以上の第一著者と第二著者とで意見交換を含めて考察すると、以下に述べる3点が日本の大学で森田療法の教育を実施する課題として挙げられた。

1) 法令による規制

日本の場合、教育学部では教育職員免許法等の法令により、授業の内容までが規制されている。この規制のきびしさは、教育学部ばかりでなく、心理系の学部、福祉系の学部、そして医療系の学部等も同じであろうと推察される。そのため、ウォッシュバーン大学のように大学独自の森田療法認定プログラムを設けるのが困難である。表1に示されるように、指導形態においては、ウォッシュバーン大学は多様な指導形態を取っており、これは自由度の高いアメリカの高等教育の制度によるものと考えられる。

日本の場合、現実的には、規制されたカリキュ

ラムの中で、いかに森田療法を授業の内容として取り上げられるかということが課題となろう。第一著者の授業では、病弱教育の分野の中の精神疾患の一部として不安障害を取り上げ、それに対する有効な治療法として森田療法を取り上げている。同じ教育学部でも、教職専門科目の「教育相談(カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。)の理論及び方法」を担当する教員であれば、教育相談等の授業の中で森田療法を取り上げることが可能であろう。

一方で、自分の担当する授業のすべてで森田療法だけを取り上げることは困難である。法令等で規制されているばかりでなく、現実に学生が卒業して教員となった場合に、担当する児童生徒は森田療法が適用される子どもばかりでなく、いろいろな子どもに対応しなければならないために、特に学部段階では基礎的な各種の知識が必要となる。このため、各種の治療法や教育法の一つとして森田療法を取り上げることとなる。これでは、森田療法家の養成とはならないかもしれないが、学生の知識の一部として森田療法が組み込まれると考えている。

2) 指導の形態

同じ表1の指導形態を比較してみると、岩手大学では、講義と演習という授業形態のみである。一方で、ウォッシュバーン大学では、多様な指導形態を取っている。

そうした授業形態以外に、合宿森田療法という合宿形式のユニークな授業がある。これは、ごく短期間の入院療法とも言えるもので、森田療法を体験的に学習するには、非常に効果的な授業形態と思われる。ただ、岩手大学教育学部では、実施することが困難である。その理由としては、正規の授業期間以外の夏休み、冬休み等には、教育実習等の実習や集中講義が立て込んであるために、合宿をするための日程が取れないのが現状である。

森田療法調査演習という海外で森田療法を学ぶ授業も岩手大学ではない。上記の日程上の課題に加えて学生の経済的な課題と英語能力の課題があるためである。

インターン実習という森田療法に関する実習に

相当する授業も岩手大学ではない。教育実習はあるのであるが、通常教育の実習は6週間の小学校あるいは中学校の実習であるし、特別支援教育の実習は2週間の附属特別支援学校での知的障害児を対象にした実習である。

卒業研究は、日本では卒業論文あるいは修士論文の研究に該当すると思われる。ただ、岩手大学教育学部特別支援教育コースでは、卒業論文や修士論文の研究題目を学生に自由に選択させているので、多くの授業を受け教育実習も行っている知的障害児や現在の特別支援教育で中心的な課題となっている発達障害児の教育などを研究課題として選ぶ学生が多い。森田療法を卒業論文あるいは修士論文の研究課題にする学生は、残念ながら少数である。

以上のように、いろいろな制約があるために、表1の指導内容・教材と実践指導を比較すると分かるように、岩手大学では、体験的な教育を十分に実施することはできず、せいぜい座学が中心の模擬的な実践指導による授業形態にならざるをえない。そのため、次に述べる教材が、どれほど体験的で実践的な学習を可能にさせることができるのかが重要な教育上の要因となると考えている。

3) 教材

第一著者が用いている教材は、森田療法ビデオ全集第1巻「生きる」と第2巻「常盤台神経科」、外来森田療法のガイドライン²⁾、そして石山・我妻³⁾の中の演習として活用できる部分である。

一方で、他の心理療法では、たくさんの学習用DVDが発売されて、実際の面接場面を学習用として公開している。そして、森田療法でも、立松⁶⁾は「外来治療を学ぶための資源として逐語録やビデオなどの生の面接記録の活用が検討される段階にきていると思われる」と述べている。この意見には、賛成である。実際、第一著者の授業では、学生をカウンセラー役と来談者役にして、石山・我妻³⁾の中の逐語録を読ませるというロールプレイで授業をしている。DVDで生の面接が上映され、さらに、その面接記録が逐語録という形であれば、学習の効果が増すものと考えられる。また、このDVDと逐語録も、外来森田療法のガイドラ

イン²⁾に示されている項目ごとに整理されて作成されるとさらにより一層効果が増すものと考えられる¹⁾。

他にワークブックと言われる自学自習用の本があると教育効果が上がると思われる。これは、設問に答える形や指示に従う形で文章などを読み手が書き込むことによって、段階的に森田療法の基本を学習できる本を想定している。これは、自学自習ばかりでなく、授業の中で、演習的な方法を用いる際にも教科書として使用できると考えられる。

いずれにせよ、教育効果が期待できる多様な媒体の教材を開発していくことが必要とされている状況にあるのではないであろうか。

V. お わ り に

立松⁶⁾は、「どの精神療法においても専門家の訓練という作業には、その療法のアイデンティティーを問い直して、その療法の発展をうながすような創造的な側面があると思われる。」と述べている。これは、研究と同様に訓練・教育は、森田療法の発展をうながすような創造的な側面があるということである。このため、学会としても、今以上に森田療法家の教育と訓練に力を注ぐ必要があるのではないであろうか。例えば、毎年でなくて数年に一度でもよいから教育と訓練に関するシンポジウムを学会で開催するとか、学会誌に教育と訓練に関する特集を組むとか、あるいは、学会員が大学でどのような教育と訓練をしているのかについて調査をするといったことが考えられる。このような機会を設けることによって、教育と訓練に関する情報交換がなされ、よりよい教育と訓

練がなされて、森田療法の後継者が育ってくるということが期待され、それと同時に森田療法の発展がうながされると思われるのである。

そして、最後に、どのようにして一人の人間としての成長を促し、より良き臨床家の訓練・教育を行い、すぐれた森田療法家を育成すべきかという大切な課題に対しては、当事者の自助グループである生活の発見会与連携した訓練・教育を考えるべきであろう。例えば、生活の発見会で実施している集談会や合宿学習会に授業の一環として訓練生を参加させるのである。こうしたことにより、不安障害の当事者と日常生活に近い環境で身近に接することができ、すぐれた森田療法家を育成する一助となると考えられる。

結論として、日本の大学での森田療法の教育については、我々森田療法家としてやらなければならないことが数多くあると考えられる。

文 献

- 1) 我妻則明：森田療法家養成のための教育内容と教育方法に関する一私案。第29回日本森田療法学会プログラム・抄録集；109, 2011.
- 2) 外来森田療法の標準化に関する委員会：外来森田療法のガイドライン。日本森田療法学会雑誌, 20；91-103, 2009.
- 3) 石山一舟, 我妻則明：アクティブカウンセリング入門 森田療法を取り入れた新しい面接技法, 誠信書房, 東京, 2004.
- 4) 中村敬, 北西憲二, 丸山晋, 石山一舟, 伊藤克人, 立松一徳, 黒木俊秀, 久保田幹子, 橋本和幸, 市川光洋：外来森田療法のガイドライン作成にあたって。日本森田療法学会雑誌, 20；89-90, 2009.
- 5) Ogawa B.: Desire for Life, Xlibris Corporation, 2013.
- 6) 立松一徳：森田療法家の訓練－歴史的な転換期を迎えて－。精神療法, 36(3)；39-43, 2010.